

夙川学院短期大学

教育実践研究紀要

第4号【2011】



【児童教育学科幼児美術講座卒展】



【家政学科ファッション専攻卒業制作ファッションショー】

教育実践研究論文

<第3類>

- ・保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [II]
-「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」の有効性-

(朝野典子)

<第6類>

- ・プライダルコーディネイト論におけるリレー講義と産学連携のトライアル報告
- ・大学における地域子育て支援
(2)しゅくたん広場での日曜講座・箱庭療法体験講座に関する実践報告

(白坂 文)

(井上千晶・番匠明美)

夙川学院短期大学「教育実践研究紀要」【SBET】投稿の手引き

1. 原稿の種類 (年1回3月発行)

教育紀要に記載されるものは、以下に示されるカテゴリーに分類される。

- 第1類：大学教育の理念や思想に関するもの
- 第2類：大学教育の制度、法およびその運用に関するもの
- 第3類：大学における専門教育に関する方法、技術、課題に関するもの
- 第4類：大学教育に適した教具・教材の開発およびその利用効果に関するもの
- 第5類：大学生の心身の特性と教育のあり方に関するもの
- 第6類：その他、大学教育の実践に関するもの

2. 投稿に関する手続き

- (1) 文の構成は、「問題の所在(または目的)」「方法」「結果」「考察」「結論」を基本とするが、教育分野や論の特性に応じて適切な章立てを設定することができるものとする。なお、参考・引用文献等がある場合、必ず文末に付記する。
- (2) 原稿は原則として、Microsoft Word(表作成についてはMicrosoft Excelも可)により作成し、完成イメージで提出する。自筆による原稿の場合、自費(または個人研究費)において入力費用を負担しなければならない。この場合、編集会議が配布するフォーマットを利用することが望ましい。その他、文字数・行数・フォント等、執筆の詳細についてはフォーマットを参照のこと。
- (3) 原稿は、完成イメージで4枚以上とし、最大10枚以内まで増頁することができる。
なお、10枚を超える場合、分筆等を求めることがある。
- (4) 写真、図については、各自が画像ファイルとして作成し、原稿内に貼り込むものとする。全てグレースケールで印刷されるため、出版時に画像の精細等に関する要求は一切受け付けない。ただし、カラー写真による掲載を希望する場合、自費(または個人研究費)により、載せることができる。
- (5) 投稿にあたっては、以下の2種の手続きのうち、いずれかによるものとする。
<A> 投稿票、完成イメージで作成し印刷した本文、本文の電子ファイル、写真・図の電子ファイルを直接、FD委員会事務局(教務課)に提出する。ただし、電子ファイルはMOまたはCD-RWに依存する。

 電子メールに、投稿票、本文、写真・図の電子ファイルを添付し、FD委員会事務局に送信する。

3. 編集に関する手続き

- (1) 原稿が投稿されると、編集会議において1名のピアスーパーバイザー(PS)が決定される。
- (2) PSは受稿後速やかに精読し、質問および意見をまとめ、投稿者に返信する。なお、PSが提示する意見や質問は、本誌が多様な読者を想定していることから、専門分野を熟知した内容でなくてよいこととする。
- (3) 投稿者はPSから提示された質問や意見について、回答または修正等を行い、再び提出する。
- (4) PSは回答または修正を確認し、「ピアスーパービジョン実施報告書」にコメント等、必要事項を記入の上、編集会議に提出する。

夙川学院短期大学

教育実践研究紀要

第4号【2011】

【教育実践研究論文】

<第3類>

- ・保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [II]
— 「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」の有効性—

朝野典子・・・・・・・・ 3

<第6類>

- ・ブライダルコーディネート論におけるリレー講義と産学連携のトライアル報告

白坂 文・・・・・・・・ 10

- ・大学における地域子育て支援

(2) しゅくたん広場での日曜講座・箱庭療法体験講座に関する実践報告

番匠明美・井上千晶・・・・・・・・ 17

- ・「あとがき」

FD 委員長 岡崎公典

第3類

保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [Ⅱ]

—「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」の有効性—

朝野典子

ASANO Noriko

本稿は、夙川学院短期大学専攻科保育専攻において筆者が担当する保育音楽療育演習の教育実践に関する研究である。当科目では音楽療育活動の実践方法の習得をめざし、「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」によって学生同士が実習経験を共有する仕組みをつくり指導を行ってきた。

2009年度履修生（45名）および2010年度履修生（13名）、合計58名を対象として実習終了後に実施した記述式アンケートでは、「自分のリハーサル」「自分の報告」「他者のリハーサル」「他者の報告」の有効性についてそれぞれ質問し、回答を得た。

その結果、「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」は全体を通して、「Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Act（改善）」の4段階を繰り返すことにより継続的な改善を行うPDCAサイクルと同様に機能し、保育音楽療育士の育成において有効であったと考える。

キーワード：保育音楽療育、実習、リハーサル、実習報告、共有、PDCAサイクル

1. はじめに

保育音楽療育士とは、一般財団法人全国大学実務教育協会が認定する資格であり、資格取得のための教育目標として「障害児教育において、発達的な視点を入れながら、保育と音楽療育に関して高度の知識と技能をそなえた障害児の専門職として、さらに生涯学習に関与できる人材の養成を目指す」と掲げられている。

この教育課程では必修科目に保育音楽療育実習（以下、実習と記す）が含まれ、学生は児童から高齢者まで幅広い領域において実習を行い、障害児や高齢者への生活支援を学びながら、学生自身が作成したプランに基づいて音楽療育活動を実践する。

筆者は、2008年度より夙川学院短期大学専攻科保育専攻において、保育音楽療育士養成課程の必修科目である保育音楽療育演習（通年科目）を担当している。前期授業では対象者に合わせた目標設定とセッションプランの立て方、音楽療育の具体的な実践

方法等を指導し、後期授業では主として実習のための実技指導を行なっている。

実習全体は専任教員の指導のもとで行なわれ、筆者が指導するのはその中の一部分である。つまり、本稿で取り上げる実習以外にも、学生たちは多くの実習を経験していることを断っておきたい。

前稿『保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践 [Ⅰ]』（夙川学院短期大学教育実践研究紀要第3号）においては、保育音楽療育演習の授業内に行った「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」に関する選択式アンケート調査（4領域20項目）の結果を考察した。

本稿はそれに続く内容で、2009年度履修生（45名）および2010年度履修生（13名）、合計58名を対象として実施した記述式アンケートの結果と考察である。このアンケートでは、「自分のリハーサル」「自分の報告」「他者のリハーサル」「他者の報告」の有効性についてそれぞれを具体的に記述するよう求めた。ここで取り上げる実習は、全員が同時期に実習を行

うスタイルではないため、授業での「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を通して学生同士が実習経験を共有することをめざした。

実習直前の学生は自ら作成したプランに基づいて音楽療育活動のリハーサルを行い、教員や他の学生からアドバイスを受ける。実習を控えた学生がリハーサルを通して他者からの客観的な意見を受け止め、問題点や課題に気づき、それらを改善・克服することによって自信をつけ、実習に臨むことを期待した。

また、実習を終えた学生は施設や対象者の様子、音楽療育活動の実際について翌週の授業時に報告する。まだ実習を経験していない学生にとっては、先に実習を経験した学生の報告を聞くことにより、実習への不安が軽減されると期待した。

2. 方法

2.1 調査対象・期間

調査対象は2009年度履修生（45名）および2010年度履修生（13名）、合計58名である。調査期間は、実習のリハーサルと報告を行った後期授業期間（2009年10月～2010年1月、2010年10月～2011年1月）である。実習が終了した2010年1月末および2011年1月末に無記名の記述式アンケート調査を実施した。

2.2 手続き

記述式アンケートより具体的な内容を抽出し、それらを分類する。さらに、筆者の授業記録を参照して考察を行う。

3. 内容

3.1 「実習前のリハーサル」の概要

後期授業開始時に「実習前のリハーサル」の目的を伝え、以下のリハーサルの実施手順を説明する。

＜リハーサルの実施手順＞

- ・実習に行く者は、実習直前の授業で音楽療育活動のリハーサルを行う。
- ・リハーサルの時間は、実習施設での音楽療育活動の時間と同じとする。
- ・リハーサルでは、実習で使用する楽器、歌詞幕、道具等を準備して使用する。
- ・実習者以外の学生は、対象者役（障害児や高齢者）

となって協力し、リハーサル終了後、積極的に質問や助言をする。

- ・実習者は、リハーサルで得た経験と、教員や学生からの助言を受けて、音楽療育活動の内容を再検討し、改善して実習に臨む。



[写真1] 実習前のリハーサルの一場面

療育士役の学生を中心に、対象者役の学生たちが半円形に取り囲み活動する。



[写真2] 実習前のリハーサルの一場面

療育士役の学生のリードによりピアノに合わせて体操する。

リハーサル終了後、療育士を演じた学生はリハーサルを通して気づいたことや反省点等を述べる。続いて対象者役の学生が感想と助言を述べ、その後、教員が具体的に助言を行う。

3.2 「実習後の報告」の概要

実習後の学生は、翌週の授業時に数分程度の報告を行う。教員は報告の留意点および内容について、

以下のことを伝える。

<報告の留意点>

- ・前に出て、はっきりとした声で話す。
- ・話を聞く人に実習の様子がありありと伝わるよう、わかりやすく丁寧に説明する。
- ・これから実習に行く人が知っておいたほうがいいと思うことを忘れずに伝える。

<報告する内容>

- ・実習の概要
施設名、実習時間、1日の生活スケジュール等
- ・音楽療育活動
活動時間帯、クラス・グループ名、対象者の障害の程度や反応、活動内容、職員の様子
- ・感想、反省、課題、改善方法等
- ・申し送り事項



[写真3] 実習後の報告を行う学生

項目の一部に対応する記述の抜粋である。

4.1.1 セッションの内容

- ・プランや活動内容を改善できた [例1]
- ・時間配分を改善できた [例2]
- ・実習までの見通しを立てられた [例3]
- ・臨機応変に対応する必要性に気づいた
- ・セッションの雰囲気把握できた
- ・準備物の工夫の必要性に気づいた
- ・準備を確認できた

[例1] もしリハーサルがなかったら、セッションの問題点を見つけられなかったと思う。プランを改善して実習に臨めてよかった。

[例2] リハーサルでは、思っていたよりも時間がかかってしまいました。プログラムの展開に無理があることがわかったので、それぞれの活動の時間配分を考え直し、実習はうまくいきました。

[例3] リハーサルで全体の流れを実際に経験できたので、実習までに自分が何をすべきなのか、頭の中を整理できました。

4.1.2 音楽の技能・使い方

- ・伴奏法を改善できた（調性、速度、音量） [例4]
- ・合図の出し方を改善できた [例5]
- ・対象者に合わせたアレンジ法を学んだ
- ・歌詞を覚える必要性に気づいた

[例4] 実際に歌ってみて、高齢者には調が高すぎることに気づきました。速度ももっとゆっくりしたほうがいいとわかりました。

[例5] ピアノ伴奏との合わせ方や、指揮の合図を出すタイミングなどを確認できた。

4.1.3 対象者とのコミュニケーション

- ・話し方を改善できた（言葉遣い、声の大きさ、速さ） [例6]
- ・対象者への受け答えを改善できた
- ・対象者の反応（行動、発語等）を予測するようになった [例7]
- ・対象者に目配りができるようになった

[例6] はじめは高齢者に敬語で話しかけるのが難しかったです、リハーサルで少し慣れました。

[例7] こちらの言葉掛けに対象者がどのように反応

3.3 アンケートの内容

次の4つの設問に対し、自由記述による回答を求めた。

- ・自分のリハーサルはどのように役立ったか
- ・自分の報告はどのように役立ったか
- ・他者のリハーサルはどのように役立ったか
- ・他者の報告はどのように役立ったか

4. 結果

4.1 自分のリハーサルの有効性

「自分のリハーサルはどのように役立ったか」という設問に対する記述内容を、4.1.1～4.1.5の5項目に分類した。[例1～12]は、それぞれに含まれる小

するかを考えてから、話したり動いたりするようになりました。

4.1.4 実習への心構え

- ・緊張に慣れた [例8]
- ・余裕が生まれ不安を軽減できた [例9]
- ・不十分な点を認識した [例10]

[例8] 人前に出てリハーサルをすることで、自分がどのくらい緊張するのかがわかりました。緊張に慣れることができました。

[例9] リハーサルがあったことで、本番では焦らずにできました。対象者の様子を見る余裕も出てきました。

[例10] 自分ではなんとかなると思っていましたが、リハーサルで皆の前に立つと、できないところが明確になって、よかったですと思います。

4.1.5 他者からの意見

- ・教員や学生からのアドバイスが役立った [例11]
- ・アドバイスを受けて自信がついた [例12]

[例11] 自分たちで考えたセッション案に対して、思いもつかなかったような意見を友人がたくさん言ってくれました。人の意見をたくさん聞いて取り入れて動いてみることも、成長の一步なのだ学びました。

[例12] リハーサルでは、先生や他の人から指摘されたり、ほめてもらうことで、自信を持って実習に臨むことができました。

4.2 自分の報告の有効性

「自分の報告はどのように役立ったか」という設問に対する記述内容を、4.2.1～4.2.2の2項目に分類した。[例13～16]は、それぞれに含まれる小項目の一部に対応する記述の抜粋である。

4.2.1 実習のフィードバック

- ・実習を振り返り整理できた [例13]
- ・質疑応答により新たな気づきを得た [例14]

[例13] 実習を振り返って、次に実習に行く人のために何を伝えていけばいいのかを考えることで、自分の頭の中も整理できたと思います。

[例14] これから実習に行く人から質問されて、自

分では気づけなかったけれど、不十分だった点に気づきました。

4.2.2 報告の技能

- ・報告の手順や伝え方を学んだ [例15]
- ・質疑応答を通して伝達内容を確認できた [例16]

[例15] 自分の経験をまとめて話すことは難しかったです。でも、少しずつ話す内容を整理できるようになりました。

[例16] 質問されてはじめて、伝えておいたほうがいい内容に気づきました。

4.3 他者のリハーサルの有効性

「他者のリハーサルはどのように役立ったか」という設問に対する記述内容を、4.3.1～4.3.4の4項目に分類した。[例17～25]は、それぞれに含まれる小項目の一部に対応する記述の抜粋である。

4.3.1 セッションの内容

- ・プラン作成のヒントを得た [例17]
- ・活動を考えるヒントを得た [例18]

[例17] 自分では考えつかないような活動の展開があって、プラン作りの参考になりました。

[例18] 他の方のリハーサルは、もっとこうしたほうがいいのではないかと、ここがよかったなど客観的に見ることができて、自分の実習に役立ったと思います。たくさんのアイデアも知ることができました。

4.3.2 音楽の技能・使い方

- ・音楽の使い方が広がった [例19]
- ・調性や速度の大切さに気づいた [例20]
- ・伴奏技術の必要性に気づいた
- ・合図の出し方を学んだ

[例19] 対象者が参加しやすいリズムで合奏するなど、参考になりました。

[例20] 伴奏者によって歌いやすい調と、歌いにくい調がありました。

4.3.3 対象者とのコミュニケーション

- ・対象者の気持ちが理解できた [例21]
- ・心地よい展開の大切さを知った [例22]

・対象者への声掛けの大切さを知った

[例21] 対象者の立場でリハーサルを経験して、対象者の気持ちが少しは理解できたように思います。

[例22] 対象者にとって楽しい活動であることや、全体の流れが大切であることがわかりました。

4.3.4 療育士の在り方

・療育士の言動を客観視できた [例23]
 ・療育士らしい話し方を学んだ（声の大きさ、速さ、言葉遣い、間の取り方） [例24]
 ・療育士らしい態度を学んだ（表情、身振り、視線等） [例25]
 ・気になるしぐさに気づいた（髪を触る、下を向く、姿勢が不安定等）

[例23] 対象者の目には療育士がどのように見えているのか、よくわかった。

[例24] 話し方など、他の人の良いところは見習って、良くないところは、自分は改善するようにしようと考えることができました。

[例25] 他の人のリハーサルを見たり聞いたりして、話し方や身振りをこうすれば相手にわかりやすいということを学んだ。そして、自分の実習で学んだことを実践すると、対象者の反応が違うように感じた。

4.4 他者の報告の有効性

「他者の報告はどのように役立つか」という設問に対する記述内容を、4.4.1～4.4.3の3項目に分類した。[例26～32] は、それぞれに含まれる小項目の一部に対応する記述の抜粋である。

4.4.1 施設と対象者

・施設の概要を把握できた（雰囲気、生活のリズム等） [例26]
 ・対象者の特徴を把握できた（身体的・心理的特徴、音楽の嗜好等） [例26] [例27]
 ・対象者の反応を把握できた
 ・セッション環境を把握できた（部屋の広さ、ピアノ・机・椅子の配置、職員数等）

[例26] 自分の実習までに施設の情報がわかり、とても良かったです。対象者はどのくらい体を動かせるのか、どんな楽器を使えるかなど細かく知る

ことができ、実習のプランが立てやすくなりました。

[例27] 対象者のできること、難しいことがわかったことよってプランを組み立てやすくなりました。対象者との関わりの中で気をつけなければならないことや、1日の流れ、音楽の好みなどをすることができ、心の準備にもなりました。

4.4.2 実習への心構え

・不安が軽減された [例28]
 ・心の準備ができた [例29] [例30]
 ・前向きな気持ちになれた [例31]

[例28] 初めて行く施設に不安があったので、話を聞いたことで少し安心できて、落ち着いた気持ちで自分の実習に行けました。

[例29] 私は実習の時期が一番最後だったので、自分の行く実習先の報告がとても勉強になりました。心の準備をする時間もたくさんあって、こういうことはしてはいけないなど、たくさん教えてもらえたことが役立ちました。

[例30] 最終グループの実習だったので、先に実習に行った人たちの話をたくさん聞いて勉強になった。心の準備もできて実習に臨めたと思う。

[例31] 他の人の実習の成功談も失敗談も聞き、どうやったらうまくいくかを考えると、さらにいい案が浮かんで自分の実習につなげることができました。

4.4.3 自分の実習との比較

・自分の実習の振り返りに役立つ [例31]
 ・音楽療育のイメージを広げられた [例32]

[例31] 私は早い時期に実習が終わっていたので、後から実習した人の報告を聞いて、自分の実習を振り返ることができた。そして新たに気づくこともあった。

[例32] 自分が実習する施設とは異なる施設の報告も聞けたので、音楽療育のイメージが広がった。

5. 考察

5.1 リハーサルと報告の機能

「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」を一体化して考えた場合、それは企業等の生産管理や品

質管理のPDCAサイクルと同様の機能を持つと捉えられる。PDCAサイクルとは、「Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Act（改善）」の4段階を繰り返すことにより、継続的かつ循環的に改善を行うシステムである。

学生たちが作成したセッションプランをリハーサルによって実行し、それを自分と他者によって評価し、改善を加えて実習に臨む。実習後には報告を行い、それを評価し、さらに改善を加えて次の実習に臨む。グループ全体で取り組んだりリハーサルと報告によって実習経験が共有され、先に実習した学生から後の学生へと橋渡しされながら、保育音楽療育士をめざす学生たちの資質向上に役立ったと考える。



〔図〕PDCAサイクル

5.2 自分のリハーサルの有効性

自分のリハーサルを経験することにより得られた気づきには、「自発的な気づき」と「他者からの指摘による気づき」の2種類がある。

アンケート記述の中には、「自分では完璧なプランができたつもりで、なんとかなるだろうと思っていた」というような内容も複数あり、頭で描くイメージと現実との落差に戸惑い、自発的な気づきを得た学生は多かったと推察する。この経験により、リハーサルと実習本番との違いも大きいことが予測できるようになり、ある種の覚悟（心の準備）ができたと考えられる。

リハーサル後に行う助言に関しては、筆者は褒めることと改善を求めることのバランスを配慮して指摘するよう心掛けたが、実際には改善を求める箇所が大部分を占めた。指摘の一部については、概ね本人も気づいていることが多いという印象を持ったが、それ以外の指摘箇所については本人は無自覚であった。つまり、他の学生や教員からの指摘と助言により、療育士役の学生が無自覚であった言動が明確になり、改善することができた。

また、学生たちはリハーサルを経て十分な準備で

実習に臨めば、不必要な緊張や不安に悩むこともないという気づきを得ている。リハーサルでの失敗を糧として、実習へと挑戦することの意味を見出したと考えたい。

5.3 自分の報告の有効性

4つの設問の中で記述文字数をもっとも少ない項目で、早い時期に実習を終えた学生の中には、時間が経過して印象が薄くなっている者もあった。

実習後の報告は、自分の経験を客観視し他者に伝えるためのコミュニケーション技術のトレーニングでもある。話す内容を整理し、話し方を工夫することは、保育音楽療育士には欠かせない資質である。質疑応答によって別の角度から光が当てられることもあり、一人ひとりの実習経験をグループで共有することが新しい視点の獲得や新たな気づきにつながったと考える。

5.4 他者のリハーサルの有効性

他者のリハーサルにおいて対象者役を演じることは、対象者の立場や心理を想像する体験となった。対象者には療育士がどのように映るのか、気になるしぐさは何か、対象者が楽しめる活動とは何かといったことを考えることで、療育士の在り方を客観視できるようになった。

また、他者のリハーサルを冷静に観察し、自分の立場に置き換えることにより、自己を客観視する機会となったと考える。あるときは他者を良き見本とし、またあるときは「他山の石」として、自分の成長に役立てようとする様子がアンケートの記述から窺える。

5.5 他者の報告の有効性

実習前の学生にとって他者の報告は、施設や対象者の情報を広く収集する機会であった。音楽活動を療育の一環として成立させるには、対象者を深く知ることが不可欠であり、それによって明確な目的を持つプランの作成が可能となる。実習前に有用な情報を得たことにより、学生たちは対象者に適した療育的な活動を考案することができるようになった。また、心理面においては不安や緊張が軽減し、前向きな気持ちで実習に臨むことができたと考えられる。

6. まとめ・課題

ある学生はリハーサルの経験を通して「療育士の目線と対象者の目線の両方を感じることができた」と述べている。このように両者の立場を想像しながら行き来することは、障害を持つ子どもや高齢者と関わる保育音楽療育士のみならず、保育者をはじめとする数々の対人援助職にとって重要な資質であると考えられる。これからも学生たちが自他の経験から学びを深め、さらに被援助者からも多くを学び取れるよう、工夫しながら教育実践に取り組みたい。

最後に、実習全体を指導される倉掛妙子先生から筆者の教育実践に多くのご助言を賜ったことに、心からの感謝を申し上げます。

7. 参考文献

- 朝野典子（2010）保育音楽療育演習における実習経験の共有をめざす教育実践〔I〕—「実習前のリハーサル」と「実習後の報告」に関するアンケート調査結果より— 夙川学院短期大学教育実践研究紀要第3号
- 松井紀和（1991）小集団体験 東京：牧野出版
- キャロライン・ケニー（2006）フィールド・オブ・プレイ 音楽療法の「体験の場」で起こっていること 東京：春秋社
- 吉田耕作（2005）ジョイ・オブ・ワーク 組織再生のマネジメント 東京：日経BP出版センター

<ピアスーパーバイザーからのコメント>

本論文で最も印象に残ったのは「途中で課題を投げ出しそうになった学生が、最後までやりぬいたことで、学生自身が自分自身の成長に気づいた。」ということである。このことから、学生ができないことができるようになった達成感によってやればできるという自信を持たたと推察できる。また、保育音楽療育演習の実習を経験することで、学生が他の履修科目においても、やればできるといふ前向きにとりくむ姿勢が発生すると思われる。

（担当：家政学科 藤島 みち）

ブライダルコーディネート論におけるリレー講義と 産学連携のトライアル報告

白坂 文

SHIRASAKA Aya

今日の結婚式（披露宴も含む）は多様化し、実に様々な形態がある。ホテルや結婚式場はもちろん、ハウスウェディングやレストランウェディングといった自分達の個性を活かせる結婚式のスタイルがあり、新郎新婦自らがゲストに対してサプライズや感謝の気持ちを表現するような、オリジナリティの高い結婚式が主流となってきている。そのため新郎新婦の幅広いニーズに応え、最高の結婚式をプロデュースするブライダルコーディネーター（ウェディングプランナーともいう）の存在が注目されている。

ファッション専攻では、将来ブライダル業界へ就職希望の学生もいることから、ブライダルに関する実践的な知識を修得することを目的とし、2006年よりブライダルコーディネート論を導入し、各専門分野の講師によるリレー授業を行っている。

また、産学連携の試みとして、神戸メリケンパークオリエンタルホテルにおいて実際にホテルウェディングを体験させてもらい、学習の成果をウェディングプランにまとめ、結婚式の現場で活躍されているウェディングプランナーの方に提案し、感想を頂いた。

本稿では専門講師によるリレー授業と産学連携の成果を報告する。

キーワード:ハウスウェディング、レストランウェディング、ブライダルコーディネーター、ウェディングプランナー

1. はじめに

筆者が担当しているブライダルコーディネート論（以下、本授業）では、ブライダルに関する幅広く専門的な知識を修得するため、「ブライダルビューティ」、「ブライダルフード」、「ブライダルフラワー」、「ブライダル衣装」といった4つの専門分野を設け、その専門分野の講師によるリレー授業を行っている。

「ブライダルビューティ」の分野では、ファッションデザイン専攻の森下非常勤講師にご協力頂き、花嫁にふさわしいブライダルメイクの講義と、指輪の交換で花嫁の手元も注目されることから、ハンドケアやブライダルネイルの実習を行った。

今回初めての試みとして、「ブライダルフード」の分野では、家政学科食物栄養専攻の石野非常勤講師

にご協力頂き、ウェディングケーキの歴史や変遷、流行などの講義と、実際にウェディングケーキのデコレーション体験を行った。

「ブライダルフラワー」と「ブライダル衣装」の分野では、筆者が授業を担当した。「ブライダルフラワー」ではウェディングブーケについての講義とブーケの制作実習を行った。「ブライダル衣装」では、ドレスのシルエットと種類について講義し、自分の着てみたいカラードレスとウェディングドレスのデザイン、ドレスにマッチする小物の合わせ方の講義を行った。

このように各専門分野の講師から講義を受け、学生達は自分の理想とするウェディングプランを企画・立案し、1冊のオリジナルのウェディングプラン（以下、プラン）をまとめた。このプランを実際に

神戸メリケンパークオリエンタルホテル（以下、ホテル）のウェディングプランナー（以下、プランナー）の方々に見て頂き感想をうかがった。

2. 方法

調査期間：平成 23 年 4 月 7 日～7 月 21 日（前期 15 回授業）

調査対象：夙川学院短期大学家政学科ファッション専攻 ブライダルコーディネータ論受講生 15 名

手続き：本授業開始から終了までの経過と、各専門分野の講師によるリレー授業から修得した知識を活用し、学生がオリジナルのプランを制作する。そしてこのプランをホテルのプランナーに提案し感想を頂き評価した。

3. 授業の展開と考察

3.1 ブライダルコーディネータ論の授業形態

本授業のスケジュールは下記のとおりである。

- | | |
|------|-------------------|
| 1回目 | ガイドンス |
| 2回目 | ブライダルの形態 |
| 3回目 | ブライダルスケジュール |
| 4回目 | ブライダル衣装 |
| 5回目 | |
| 6回目 | ブライダルフラワー |
| 7回目 | |
| 8回目 | ブライダルビューティ |
| 9回目 | |
| 10回目 | ブライダルフード |
| 11回目 | |
| 12回目 | ブライダル施設の見学(学外授業) |
| 13回目 | |
| 14回目 | オリジナルウェディングの企画・立案 |
| 15回目 | ウェディングプラン制作 |

3.2 プランのテーマと内容

授業の最終回に完成させるプランのテーマは、「自分の理想とするウェディング」で学生が自分自身の理想とする結婚式をプロデュースする。プランの内容は、プロポーズされてから結婚式・披露宴当日までの期間にどのようなスケジュールでどのような準備

内容を段階的に行うかを時系列にまとめる。

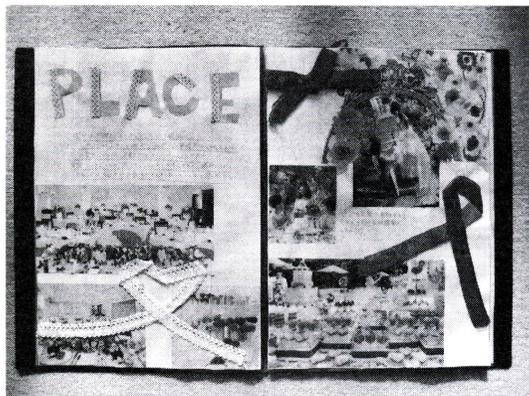
まず結婚式の日取りを決定する。日取りは 2 人の記念日や誕生日、クリスマス、バレンタインデー、また古代中国の陰陽五行説に基づいた、吉凶を占う「六輝」も参考に自分の希望とする日取りとさせた。

次に、その日取りに向けどれくらい準備期間を設けるか検討させた。講義の中では 8 ヶ月間で結婚準備を行うスケジュールを例に挙げ解説しているが、1 年以上じっくり準備期間を設けたいと考える学生、半年ぐらいである程度勢いにまかせながら準備したいと考える学生様々である。

結婚式までの流れは①「プロポーズ」→②「親への挨拶（挙式 8～6 ヶ月前）」→「結婚式場を探す（7～6 ヶ月前）」→③「婚約指輪購入（7～6 ヶ月前）」→④「結納・顔合わせ食事会（6～5 ヶ月前）」→⑤「結婚式場決定（6～4 ヶ月前）」→⑥「衣装・ブーケ決定（5～3 ヶ月前）」→⑦「披露宴の食事内容・引き出物等アイテムの決定（5～4 ヶ月前）」→「結婚指輪購入（4～3 ヶ月前）」→⑧「招待状のデザインとゲストのリストアップ（3 ヶ月前）」→「招待状投函（2 ヶ月前）」→「披露宴のプログラム・演出決定（2～1 ヶ月前）」→⑨「ブライダルエステ（1 ヶ月前～）」→⑩「結婚式・披露宴当日」となる。プランには①から⑩の場面の準備内容を入れることとし、様々な授業の中で得てきた知識をフルに活用し、また自分なりにより深く掘り下げ研究し、雑誌の切抜きをコラージュしたり、自分でイラストを描いたり、レースやリボンで飾ったりと、自分の理想の結婚に向けたオリジナルプランを完成させた。

学生の制作した 15 作品のプランの中から、以下 4 作品の事例を紹介し評価する。

【事例①「GOLDEN WEDDING」I・Nさん】



—ウェディングプランナーからの感想—

- ◇ とにかく「かわいい！」 カラースキームがピンクとしっかり打ち出せており、ピンクに統一されている点が新婦のこだわりなんだと参列者にもわかりやすい！例えば、参列者にも必ず何か1つピンクのものを身につけてきてもらうなんて企画があってもステキ。
- ◇ こうやって見ると色にはいろいろな意味が込められているので、「ピンク」⇒愛・幸福感を参列した皆様にも味わって頂きたいという意味が込められているということをパーティの中で是非紹介したいと思った。
- ◇ 明確にカラースキームを「ピンク」と決めているので、デザートブッフェやテーブルコーディネート、ケーキやブーケなどしっかりとカラーテーマにそった選択ができそう。
- ◇ お色直しにかかる時間まできちんと記載されており、こういったことは普通の新郎新婦は知らないので、情報として知らせてみると喜ばれそう。お色直しにこんなに時間がかかるときちんと最初からわかっていたら、たとえば写真は事前にとっておくなどの対処もできる。
- ◇ 新婦についての知識も深く、エクステのほうが泣いても大丈夫とかチップはとれやすいなど、本当によく勉強している。新婦にとってよい相談相手(プランナー)になれそう。

<評価>

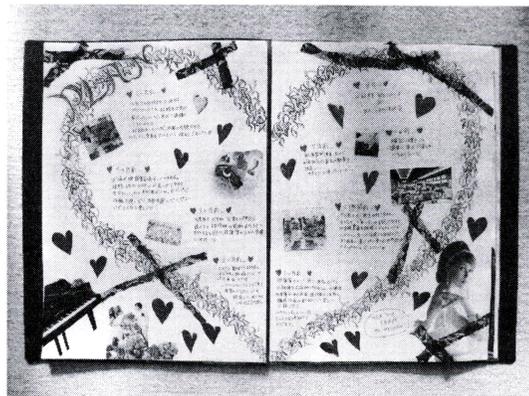
I・Nさんのプランはページ全体がピンクでまとめられており、レースのピンクのリボン結び、各ページにちりばめられているところが立体的となって面白い。非常に女の子らしいかわいらしさ満載のプランである。

カラードレス、ブーケ、会場の装飾・装花、ウェディングケーキ、ゲストに振舞うデザート…とにかく全てがピンクで溢れている。一般的に結婚式や披露宴にピンクを使うことは多いが、ここまでピンクにこだわったとは驚きである。

プランナーから『参列者にも必ず何か1つピンクのものを身につけてきてもらうなんて企画があってもステキ』や、『色にはいろいろな意味が込められているので、「ピンク」⇒愛・幸福感を参列した皆様にも味わって頂きたいという意味が込められているということをパーティの中で是非紹介したい』との意見を引き出せたことは大変よかった。

またブライダルメイクの講義で得た知識として、「付けまつげ」より「エクステ」の方が涙に強いことや、「ネイルはチップの方がとれやすい」などのプチ情報は、若い彼女たちならではの経験からくる意見で、プランナーにとっても参考になる意見となっている。

【事例②「WEDDING HALLOWEEN 10.31」E・Yさん】



—ウェディングプランナーからの感想—

- ◇ 黒のレース使いや辛めのカラートーンがステキ。しっかりと自分(自分の好み)を持っている新婦の印象を受けた。
- ◇ 私たちウェディングプランナーが新郎新婦から商談(相談)をお受けする際、どんな雰囲気(演出)のパーティにしたいか、明確なイメージを持たれていない方が多いが、こういった「ハロウィン」→「仮装」という明確なテーマにこだわるといったパーティもあるんだなと衝撃だった。
- ◇ 「ハロウィン」というテーマにとことんこだわり、挙式日を10月31日というのは想像できたが、開始時間を666にちなんで、6時66分⇒7時6分という発想力の柔軟さに驚いた。ステキ！

- ◇ 仮装のウェディングパーティなど、新しいスタイルで話題を呼びそう。ただ、親御さんや親族などのまだまだ結婚式に対する堅い意識をもった層にとっては、少し抵抗がありそうなので、その点も配慮して、親御さんにとっても嬉しい、自分たちにとっても嬉しいスタンスにするためにもパーティを2部構成(親族系できっちり食事会+友人系で 1.5 次会スタイル)などにして行っても楽しそう。
- ◇ 全体的によく勉強されていると思います。出会ってからのストーリーや式当日までの流れもとてもリアルに表現できていますし、ケーキや引き出物の意味もしっかりと記されており、当たり前のように用意しているものにも、実はきちんと意味があり、知っているとなお楽しい気分になれますね。まだ何も知識のない新郎新婦にはこんなことも勉強になりそう。

<評価>

E・Y さんのプランのカラーテーマは一般的に多い白やピンクや赤ではなく、黒や紫のダークカラーを用いているところが非常に目を引いた。

クリスマスやバレンタインデーをテーマにした披露宴を行うことは多いが、「ハロウィン=仮装」をテーマにした披露宴は初めてで、目の付け所が面白いと感じた。本人も仮装が好きで、サプライズが大好きとのことである。一般的な結婚・披露宴より砕けたカジュアルなパーティを企画し、ドレスコードは「ハロウィンの仮装」というところは非常に斬新なアイデアと言える。プランナーも『仮装のウェディングパーティなど、新しいスタイルで話題を呼びそう』と驚きの感想を述べている。

お色直しではハロウィンをイメージした黒とオレンジ、紫のカラードレスに着替え、ゲストの前で自らピアノの生演奏を行うというサプライズを企画している。ゲストと近い位置で盛り上がりたいという考えで、自分のスタイルを前面に出したプランは、花嫁参加型の新しい披露宴の提案といえる。

【事例③「Happy Wedding」受講生 S・M さん】



—ウェディングプランナーからの感想—

- ◇ まさに正統派ウェディング! という感じの、白・ピンク・赤を貴重にしたカラーコーディネートで全体的に清楚で優しい印象を受けた。親御さんや上司に必ずうける結婚式になりそう。
- ◇ 表紙の4箇所レース使いのリボンが立体でつけられており、とてもインパクトがある。わくわくする表紙だ。
- ◇ 二人のパーティまでのスケジュールストーリーが出会いからしっかりとイメージできている点を見て、改めて二人のストーリーはパーティの打ち合わせからではなく、ここから始まっているんだと考えさせられた。私たちプランナーも反省点だと思った。もっと二人の出会いやプロポーズといった部分からクローズアップしたパーティを提案していきたいと考えさせられた。
- ◇ リゾートウェディングがしっかりと表現されており、リゾートならではのゆったりとした開放感あふれる気分、新郎新婦だけでなく、お招きするゲストの方々にも満足してもらえそう。新婦の大好きな赤というカラーテーマのパーティがとてもハートフルなイメージに完成されている。
- ◇ ウェディングケーキが3段と豪華で南国のフルーツがたっぷり味はもちろん、見た目も楽しめそう。またゲストに振舞うクロカンブッシュは新婦自身で作り、ちんすこうというところがオリジナルで面白い。
- ◇ ダイヤモンドの「4C」についても勉強されており、新婦にとってこういったジュエリーも結婚という行事の大切な一部と改めて実感した。
- ◇ 二人が参列者をきっちりとてなしたいという気持ちが随所にみられた。(一人ひとりに手書きのカードを

添えたり、引き出物のラッピングを男性用/女性用と変えるなど…)

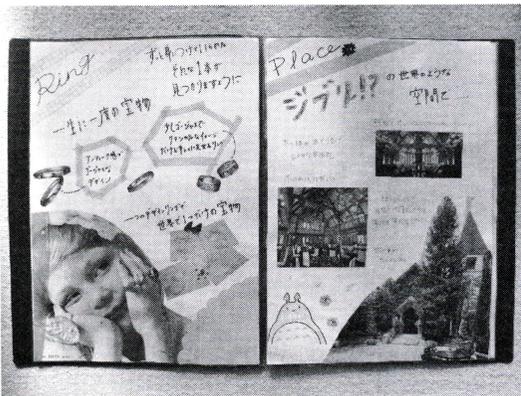
<評価>

S・Mさんは沖縄出身ということで、沖縄にこだわり、沖縄らしさを表現したリゾートウェディングのプランを制作した。よって会場選びにはかなり時間をかけ吟味し、沖縄の美しい青い海と青い空が一望できる教会をセレクトしている。そんな美しい風景をゲストにも十分楽しんでもらいたいと、一面ガラス張りで景色を楽しめる披露宴会場を選んでいるところもゲストへの配慮である。

衣装についてもこだわりがあり、青い海と空に映える色として真紅のカラードレスをお色直しで着る予定としているが、沖縄以外から来てもらうゲストに対し、もう一着「琉装」という沖縄独特の婚礼衣装を着てゲストに沖縄らしさを感じてもらいたいと考えている。

またブライダルフードの講義で世界のウェディングケーキを学んだ時にアイデアが浮かんだとのことであるが、ウェディングケーキとは別に、フランスの伝統的なクロカンブッシュのシュー部分を沖縄銘菓のちんすこうを用い、会場でゲストに振舞いたいというのも非常に面白いと感じた。沖縄の良さをゲストに十分満喫してもらえるプランの提案となっており、「〇〇出身」との部分に前面にアピールしたプランが新しいと感じた。

【事例④「Natural WEDDING」受講生 F・Mさん】



—ウェディングプランナーからの感想—

- ◇ 表紙のカラーイラストから最後のページまで、ナチュラルカラーで統一されており、新婦のこだわりが『緑や木といった自然的モード』と表現できている。
- ◇ スケジュールのほか、「Meeting」というページがとても印象的。結婚式では、実は打ち合わせを進めて

いくごとに新郎新婦やお互いの家族のスタンスの違いなどが少しずつ生じて、よくケンカされることも多いのが現状なので、お互いの結婚式に対するイメージや求めるものを事前によく話し合っておくことはその後のためにとても大切。その点を理解してできている点にとっても驚いた。

- ◇ ジブリの世界というしっかりとしたテーマがステキ。よく「ゴージャスにしたい」「気軽にワイワイしたい」という漠然としたスタイルを希望されるゲストはいるが、こういったしっかりとしたこだわりテーマのポイントを決めることで、しっかりと軸をおいて今後の打ち合わせができそう。照明もオレンジ系、自然を感じる緑溢れる雰囲気や挙式、参列者の服装はシンプルで・・・など、随所に肩肘はるような雰囲気のパーティではなく自然に・・・というテーマのこだわりが見える。
- ◇ ドレスデザインが衿元や長袖というデザインが新婦の清楚さを彷彿とさせる。レトロな雰囲気や開場にもよく合いそう。

<評価>

F・Mさんのプランは自身の大好きな『ジブリの世界』が表現されている。教会は深い森の中の小さな教会をイメージしており、木材をふんだんに使用した木造タイプで、教会内部にも大きな木の鉢植えをいくつもセッティングし教会の中に森を再現している。アンティークなパイプオルガンの演奏で厳かに新郎新婦が入場してくるという設定はまるで物語りのようで、F・Mさんの強いこだわりが感じられる。

披露宴会場もナチュラルなウッドタイプのレストランを選び、そこにも大きな木の鉢植えを沢山セッティングし、トトロの森を再現するとのことである。2011年にイギリスのウィリアム王子とケイト・ミドルトンさんがウエストミンスター寺院で挙式したが、祭壇へ進む長いバージンロードの両側には多くの樹木が配された。このように教会の中にも樹木など自然をふんだんに取り込む提案も今後人気を呼びそうである。

またF・Mさんのジブリを再現する結婚式のように、自分の好きなアニメや映画のヒロインに変身できる披露宴というのも今後の新しい提案といえる。

4. まとめと今後の課題

本授業受講生のオリジナルプランをウェディングプランナーに提案し感想をうかったが、学生が提案したプランには、ピュアな心と夢がたくさん詰まっていた。当然学生のプランはプロのプランナーに比べると未熟で完成度も低く、知識や経験はプランナーの足元にも及ばない。しかし、そんな学生だからこそ「こんな演出は費用的に無理だろうな」とか「ゲストの親族にはどう思われるだろう」といった心配をよそに、とにかく「夢を形にしたい!」という思い切った提案ができたところが、逆によかったのではないかと考える。

また神戸メリケンパークオリентホテルの内匠陽子(たくみようこ)氏より、『式場選びをする新郎新婦の相談内容の一番は費用。ホテルのウェディングプランナーという立場では、新郎新婦の現実的な悩み(出費や出席者など)の解消が第一優先となり、お金の話から入ることが大半。

またチャペルや披露宴会場を紹介する時にも、先ずは写真を見せて説明。これは時間的ロスを無くすため。どうしても事務的な説明となってしまう、誠意や暖かみはなかなか伝わらない。

このようなプランをまとめたものがあれば、どこの会場にしようか迷っている新郎新婦にも単なるハード面を見比べるのではなく、夢や憧れを形にできるウェディングプランを紹介し、暖かみのある接客ができる。我々プランナー自身もこのような手づくりのプランを作り、お客様に見て頂いてはどうかと検討しているところ。私たちが新郎新婦に提案することは、ビジネスとしての「作業」になっていたが、この心のこもった「ひと手間」が大切だと学生さんのピュアな気持ち(作品)に気づかされました』という貴重な意見を頂いた。若者の感性に触れ、また若者の生の意見を聞くことができ、今後のプランナーとしての仕事にも活かせるアイデアを学生の提案から感じて頂けたようで非常に有意義な試みであったと感じる。

学生たちも普段なかなか足を踏み入れる機会のない結婚式の現場を見学し、結婚式というものは多くの専門分野から、また多くの人々の協力によって成り立っているということを理解することができた。

このような点から少しではあるが、産学連携の成果を感じる事ができた。

また学生へのフィードバックとして、ホテルのプランナーの方からの感想をプリントし、各自に配布

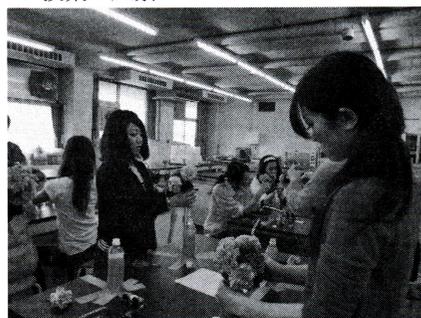
した。実際に現場で結婚式をプロデュースしているプロのプランナーの方々からの意見は、学生たちにとっても大きな自信や励みになったようである。しかし、授業最終日の7月21日に提出したプランをホテルのプランナーの方に見て頂いたのは夏期休暇中で、学生へ評価をフィードバックしたのは後期授業が始まってからであった。後期は本授業がないためもっと早くに評価の内容を聞き取ったとの声も一部の学生からはあった。

半期授業の場合、作品の提出が最終授業という場合も多いと思われ、学生にとってはできるだけ早く評価を聞きたいというのもっともであり、今後の検討課題としていきたい。

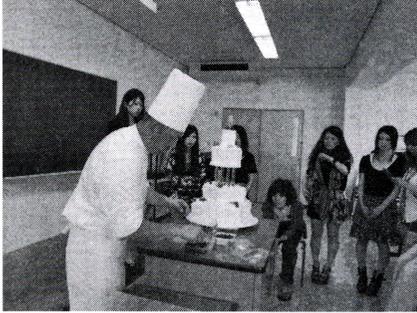
5. 謝 辞

本授業は多くの方々の協力を得て実施することができた。リレー授業を担当して下さった森下貴代子講師、石野光洋講師、ブライダル施設見学を快くお受け下さり、学生のプランについて多くの感想を聞かせて下さった神戸メリケンパークオリентホテルの内匠陽子氏をはじめ、ウェディングプランナーの皆様にも厚くお礼申し上げます。

<リレー授業の風景>



ブライダルフラワー(ウェディングブーケ)



ブライダルフード(ウェディングケーキのデコレーション)



ブライダルビューティ(ハンドパック)



ブライダル施設見学(神戸メッセパークオリエンタルホテル)

ピアスーパライザーからのコメント>

学生の年代にとって関心の高いブライダルの知識を専門的かつ総合的に学び、さらにウェディングプランをまとめ、実際にこの仕事に携わる方の評価を受けるところまでを講義に盛り込んだ実践は画期的で、学生にとって将来の就職までイメージできる講義の報告である。紹介されたプロの文章からもブライダル産業に真剣に取り組む若者の姿が見え、新しい職種紹介でもある。

本報告は学生が強い興味を持って取り組み職業観を具体的に持てる点が意義深く、参考としたい。

(担当：児童教育学科 三木 麻子)

第6類

大学における地域子育て支援[†]

(2) しゅくたん広場での日曜講座・箱庭療法体験講座に関する実践報告

番匠明美・井上千晶

BANSHO Akemi・INOUE Chiaki

本学の地域子育て支援ルーム「しゅくたん広場」が開室から2年目を迎え、新たに取り組んだ2つの試みについて報告する。平日に実施する定期講座はほぼ母親の参加となっている。しかし、子育ての大切な協力者である父親にも、子どもとかかわる楽しさを味わい、父親らしい子育ての大切さを実感してもらいたい。そこで、父親が参加しやすい日曜講座を開催した。そして、参加した父親たちの子育てに前向きに取り組みたいという気持ちを支えることが出来た。また、母親達が抱えているそれぞれの思いを表現し、自分の子育てに自信を持って元気に子どもと向き合えるように、あるいは母親が自分の生き方を考えることが出来るようになってほしいと考えている。そこで、集団の講座ではすくい取りにくい個々の思いに対して、箱庭療法を1つの道具として取り入れ、体験講座を試みた。以上の2つの実践報告を通して、大学における子育て支援の方向性を検討する資料としたい。

キーワード：地域子育て支援・家族支援・箱庭療法

1. はじめに

本学において、平成21年10月に開室した「しゅくたん広場」は、兵庫県西宮市の少子化対策の取り組みの一環として、地域子育て支援センター事業の「広場型」に位置づけられるものである。本学は以前より大学内外の行事や取り組みを通して、地域との結びつきが深い。そのため、子育て支援の実践においても、本学の特色を生かし、新しい親と子の育ちを考える〈地域のたまり場〉の役割を担うことを目指し取り組んできた。

これまでの「しゅくたん広場」の利用状況から、2才までの親子が90%以上を占めていること、週1回以上入室するケースが19%あり、周辺地域に居住する親子の利用が約70%あることなど、広場が地域に根ざした親子のための生活の一つの場として機能し始めていることが捉えられた。また定期的に開講する講座への参加や図書館等の学内施設の利用などが主に母親達にとって子育てをしつつ、自分自身の生き方を考える糸口となっていること

がうかがわれた。一方、次世代を担う学生達にとっても、構内で利用者親子と出会うことや、ボランティア等として広場を利用する中で交流が深まり、それらの経験が彼らの学びに役立っていくことも見受けられた。これらの実践に関してはすでに研究報告(井上他、2010)で検討してきた。また、そうした取り組みの中から、夫婦や世代間の問題が子育てにも影響を与えていること、母親達が日々の子育てのなかで様々な思いを気持ちの中にためていることなどが問題として浮かび上がり、新たな課題となった。そこで本研究では、これらの課題に対する取り組みとして、まだ実施回数は少ないが、開室2年目に新たに実施した父親参加型の日曜講座による家族支援と心理療法の一技法である箱庭療法を利用した体験講座を取り上げ、今後大学という場で行っていく子育て支援の可能性を検討するための実践報告としたい。

2. 日曜講座における試み

地域のたまり場としての役割を担うなか、不足しがちな父親と子どものかかわりを援助することに目を向け父親の参加を目的とした講座の取り組みを行う。オープンキャンパスが開催される日曜日にあわせ、「しゅくたん広場」を開室することにした。「しゅくたん広場」を体験してもらい、子どもとのかかわり方や遊び方を父親に伝えたいと考えた。また、オープンキャンパスのイベントにも参加し、高校生との交流も生まれ、家族で楽しめるようにした。家族同士がかかわりやすい人数を考慮し、10組の親子を募集した。

【日曜講座の内容・参加状況】

父親参加の講座を開講するにあたり、どういった内容の制作にするのか保育アドバイザーと検討を重ねた結果、季節感があり、日常使えるものにする。誰もが少しの工夫で完成させることができ、達成感や満足感を感じられるものにしたいということが決まった。講座の参加は一回限りの人がほとんどなので、次にはもっと良いものを作りたいという気持ちより、満足の行くものが出来た、楽しかったと思ってもらうことが重要だと考えた。制作については得意なお父さんもあるだろうが、苦手なお父さんもあるので家族の前でお父さんが中心となり活躍できる場をすることを目的にした。

その結果、次のような内容の講座を行う。

〈ペットボトルで風鈴作り〉

・新しい素材キラキラシール色紙やペットボトルという身近な材料を使って親子で楽しく風鈴作りをする。上から10センチ程度に切ったペットボトルの中に鈴を紐で通しキラキラシール色紙で飾り完成させる。キラキラシール色紙を用いてスタッフが子どもの喜びそうな飾りシールを数種類準備したのと、他にも少し手を加えるだけで飾りシールが完成できるように様々な形に切ったものを準備した。初めて触れる素材キラキラシール色紙に興味津々だった。準備していた飾りシールも「かわいい」と好評だったが保育アドバイザーが作った飾りシールに刺激を受けて「作り方を教えて下さい」と言うお父さんがいた。紙にイラストを描いて教えると子どもさんのために一生懸命作って完成させた。後で聞くと子どもさんの大好きなキャラクターだったそうだ。



「お父さんのおひざに抱っこ」「かわいいアンパンマンの風鈴完成」

〈オリジナル布カバン作り〉

・布描きクレヨンを使って親子で自由に一緒に描くことを楽しみながら布カバンを完成させる。

布描きクレヨンを使ってカバンに描いたり、フェルトを切り抜いて作った花を木工用ボンドで貼り付けて完成させる。クレヨンはアイロンで熱を加えると色が定着する。このようなクレヨンがあることを知りとても関心を持ったようだ。

カバンの両面に描くことができるので一面は子ども、もう一面はお父さんというように分担して描いたり、両面とも子どもたちの描きたいように自由に描かせ、フェルトを切り抜いた花などはお父さん、お母さんが思い思いの場所に貼るという姿が見られた。

今回の講座に参加した子どもは年齢が低いためなぐり描き程度しかできないが、パステルカラーを用いて描いたのでそれぞれかわいく仕上がった。昨年と同じ布カバン制作をした親子が一緒にいたが昨年に比べて絵に成長が見られたので嬉しく思う。実際に買い物などで使いたいなどの言葉が聞かれた。



「お父さんと一緒にできてうれしいな」「どんなカバンができるかな」

〈うちわ作り〉

・親子でうちわ作りを楽しみ季節感を味わう。あらかじめ、うちわの骨組みに和紙を貼り土台を作っておいたものに子ども達がプチマジック（小さい子ども用のマジック）でなぐり描きや、キラキラシール色紙で作ったシールを貼るなどして完成させた。キラキラシール色

紙を丸、三角、四角に切ったものやクラフトシールなども用意はさきで切るなどそれぞれ工夫を凝らして飾りに奮闘する姿が見られた。

初めて参加されるお父さんばかりの講座だったので、珍しい素材に触れ親しみ、童心に戻って楽しむ姿が印象的だった。

* いずれも制作の内容は簡単なものだったが、家庭ではあまり手にすることのない材料、素材を提供したことで興味を持って楽しく参加でき少しの工夫で作れるということを知り「やってみよう」「やりたい」という気持ちを持ちたようだった。手遊びや絵本の読み聞かせも毎回行ったが、覚えようと大きな声で歌ったり小さい子どもの手を取り身振り手振りをまねさせようとする姿も見られた。「広場」で日頃親しんでいる体操なども一緒に楽しむ。ほとんどが父親、母親と家族での参加であったが、父親と子どものみの参加もあり「今日はお母さんにゆっくりしてもらいます」という声も聞かれた。一方、父親が急に勤務になり母子と祖母の参加という家庭もあった。



「かわいい！うちわができました！みんなではいチーズ！」

【講座を終えて】

普段から父親は「しゅくたん広場」の様子について母親から聞いているが、どんな場所か想像の域を超えることは無かった。今回参加することによりわが子の気に入りのおもちゃを知り、同じ年頃の子どもと遊ぶ姿を見たり他の家族との交流もできた。父親も子育てに協力し、母親の負担を軽減したいと思っていたが、子どもの世話は母親の方が上手だと思い、自信を持っていないことがわかった。遊びの実践方法を知り、自信を持って子ども

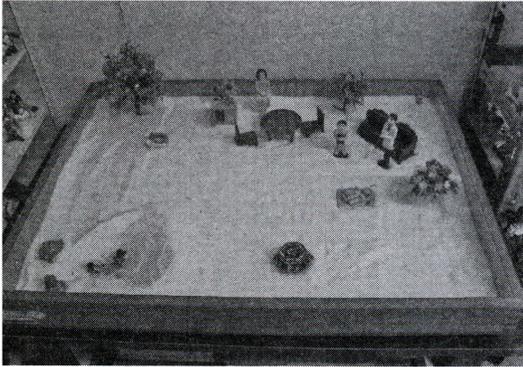
と接することができるようになり、「しゅくたん広場」が夫婦共通の話題となった。「今日はしゅくたん広場どうやった？」が父親の帰宅後の第一声になっていることや制作した作品は家庭で飾ったり、実際に使っており、見るたびに楽しかった制作のひと時を思い出しては心を和ませているとの報告を得ている。 (井上)

3. 箱庭療法体験講座における試み

【体験講座の方法とねらい】

本学では学生相談室に心理療法の1つの技法である箱庭療法の用具が設置されている。学生たちが相談室で心理療法を受ける中で利用したり、授業で箱庭療法を知った学生が自分のことについて考えるために一度やってみたくて来室し、この療法を体験することがある。こういった学生とかかわるなかで、筆者はこれまでに比較的健康的な学生達が、箱庭療法を体験することで自分自身と向き合い、新たな可能性に気づいていく点に注目してきた(番匠、2009)。そこで、広場を利用する母親たちも、日々の子育ての中で感じている、少しずつ心の澁のようになって積み重なっていく、言葉にしにくい思いを箱庭療法の体験を通して 表現し、見つめ直すことが出来るのではないかと考えた。明日からの子育てに向き合い、自分らしく生きることを考えるための糸口として、箱庭療法を子育て支援の講座として取り入れることにした。月に1回定期的に開かれる講座とは別に、箱庭療法体験を希望する利用者から予約してもらい、一人約一時間程度の時間設定で行っている。母親が学生相談室で箱庭療法を体験している間、子どもは広場で祖父母や父親あるいは広場主任の教員がかかわることになっている。箱庭制作後、母親と筆者とで出来上がった箱庭をみながら、表現されたものについて話し合う時間を持つ。開室から2年目を迎え、新しい取り組みとしてこの体験講座を開設した。諸条件を調整しながら、実施時間を決めていくため、ほぼ月1回のペースで行い、これまでに10人の母親が体験している。まだ事例数は少ないが、それらの箱庭に表現された世界と、その体験の中で母親によって語られたものから見えてきたことについて報告し、本学の特色を生かした、大学で行う子育て支援の方向性を考えていきたい。

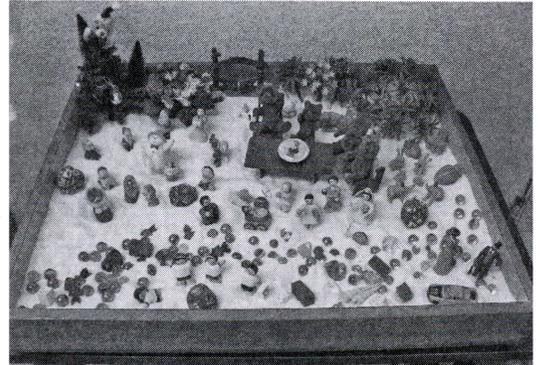
【大学における子育て支援としての箱庭療法体験】



(箱庭1)

箱庭1：箱の向こう側は自分の家族を連想して置いている。手前左側は砂を掘り、水の中に2匹の金魚を置く。水辺にはのんびり休んでいる感じのかえるが2匹いる。この制作者は水辺が好きで、水があるとほっとできるとのこと。作品に題名はつけていない。筆者は全体的にシンプルで、しずかな印象を受けた。

箱庭1を制作した母親は、まず初めに箱庭の中におだやかな家族の生活を表現された。そして箱の右手前には何も置かず、最後になって小さなかわいい宝箱だけをそっと置かれた。制作後にいろいろと話し合う過程で、筆者がその宝箱について、「ここだけはまわりと少し違った大事な場所になっているように感じますね」と感想を述べると、「ここには大切なものや、いらいらしたこと、しんどいことが詰まっています、たまに溢れそうになって、ふたがカタカタとなるけれど…」と人におしゃべりをするのが気持ちの解消になっていることが語られた。そこから話題が兄弟の問題に向けられ、それについて筆者からアドバイスをし、今後必要な時には広場の保育アドバイザーや筆者などと相談できることを伝えた。この母親は兄弟の問題で、現状をそういうものだと言いつつもながらもイライラ感を募らせていたようである。箱庭療法体験を通して、これまで気がつかなかった子どもとのかかわり方をアドバイスされ、試しにやってみようという子育てに対する前向きな思いが生まれたことと、また何かあれば気楽に相談できる場所を得た安心感とで、気持ちがすっきりと落ち着いたようであった。



(箱庭2)

箱庭2：ビー玉を並べて作られた川より手前は現実的な世界を表現している。この川より向こう側はファンタジーの世界。箱の一番奥には森があり、少し開いた門も置かれ、その向こう(箱の外)にもまだ何か世界が広がっていることを感じさせる。玩具がたくさん使用されたことで、とてもにぎやかで楽しい印象を受ける。その一方で、箱の中を多くのフィギュアで埋めておかなければ心配という制作者の不安な気持ちも感じられる表現である。しかし、ところ狭しとフィギュアが詰め込まれた表現は、その中でクマの家族や女の人の一生など、それぞれ小さなまとまりでテーマを持っており、微妙なバランスを保つてうまく箱の中に納められている印象を受けた。

この箱庭を制作した母親は箱いっぱい溢れんばかりのイメージを表現された。ミニチュア玩具が箱の中にたくさん置かれ、混乱している印象はないが、日常的な表現がファンタジックな世界に埋もれてしまっているように感じられた。筆者のその印象について母親と話し合うなかで、豊かなイメージを大切にしながら、子どもとかわる時には少し気持ちを整理し、ことばをかけるようにしていこうという方法をみつけていった。

広場の保育アドバイザーから日頃の様子を筆者は聞いていたため、箱庭作品から考えられることを参考に、この母親に何かを伝える時には、たくさんの事を一度に言わず、わかりやすい表現で示すことなどを保育アドバイザーに伝えた。そして、この親子の安定したかわりを支えていくことが広場でのやりとりの中からもできるような調整を試みた。

箱庭療法は治療者に守られた中で制作するというプロセスが、治療のためには非常に重要な部分である。そし

て、より健康度の高い人の場合、制作後に出来上がった作品を制作者と治療者とで共に味わい、見ていく過程で、両者の間で箱庭表現について「語られること」が、ことばにならなかった思いをことばにし、意識化していくという意味で、非常に大切なことと感じている。

特に、子育て中の母親の場合は、箱庭を制作することを通して、子育てをする以前の自分自身に目を向け、時間に追われて流されがちな現在の生活やその中で感じている思いに気持ちを止め、これからの問題に向き合っていくようにしようである。

そのような心の動きはある母親の場合には、自分自身の幼少期の母親との関係におよび、そこからの視点で、さらに現在母親となった「私」と子の関係を見つめ直すという心の作業に至ったこともある。

また、箱庭に表現されたものを通して、ある母親は産休後に復職することに関して抱えている不安な気持ちを語る過程で、実は仕事のことよりも今後自分がどのように生きていきたいのかという心の奥に仕舞い込んでいた問題に気がついていったケースもある。

現在は原則として1回のみ体験講座となっているが、必要に応じて継続できる形式を検討し、母親達が自分の中から出てきたことばをつかみとっていくような心の作業が行える場を箱庭療法を通して提供していきたいと考えている。

最後になったが、本学の広場は出入りが自由な場ではあるが利用者はリピーターが多いため、広場主任の教員や保育アドバイザーが利用者の親子の様子についてかなり把握することができている。そういった安定した関係性が背景にあるからこそ、本学の広場の特色を生かした形で箱庭療法を体験講座として設けることができていることを記しておきたい。(番匠)

4. 今後の課題

母親だけでなく、その家族を地域が見守り子育てを支援していくこと、また、一人一人の思いを大切にしていって向き合っていくこと、そこから父親が参加できる講座を試行し、また心理治療の技法を取り入れた講座を開催している。さらに、こういった体験の中から、支援されてきた人が支援する者へと育っていくような橋渡しの役割を、教育の場である大学における子育て支援の役割の1つとして考えていきたい。

また、本学では学生たちが気軽に、身近に母子と触れ合うことの出来る広場となっているが、学生ボランティア等の利用はあまり進んでいないのが現状である。将来保育の現場や母親となりうる学生たちにとっては非常に貴重な経験を積むことの出来る機会である。例年行っているが、授業で利用することも含め、学生たちの体験の場として、活用度を上げていくことを検討している。

さらに、活動を学内に限定せず、地域に出張し、広場の開催を行い、親子が集うことで大学内にて培ってきたものを逆に大学周辺地域へと還元できるような取り組みも今後実現させていきたい。

文献：

- 1) 井上千晶・番匠明美・三木麻子 2010 大学における地域子育て支援—しゅくたん広場での実践 夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第3号 pp17~24
- 2) 番匠明美 2009 保育者養成コースにおける“表現する”活動の試み(Ⅲ) —箱庭療法体験の実践例より—夙川学院短期大学 教育実践研究紀要 第2号 pp.64~71

<付記>

本稿は、夙川学院短期大学 児童教育学科 しゅくたん広場主任と担当者である筆者らが「全国保育士養成協議会第50回研究大会」(2011年9月9日)において発表した内容をもとに加筆修正したものである。

最後になりましたが、しゅくたん広場における日々の活動や種々の講座開催等を通して、常に本学らしいおだやかな空気感を保ってくれている保育アドバイザー(原田佳代・森岡望・新山友里)の先生方に感謝致します。

<ピアスーパーバイザーからのコメント>

本報告では地域子育て支援ルーム「しゅくたん広場」で新たに開講された2つの講座の実践例により、大学における子育て支援の可能性が述べられている。各体験講座の様子の詳しく具体的な説明により、これらの実践が「支援されてきた人が支援する者へと育つ為の橋渡しのような役割」となっていることが理解できる。今後も「しゅくたん広場」が利用者のみならず保育者を目指す学生、また学生を指導する教員にとっても「支援についての学びを深める場」として、更に発展してゆくことを期待する。

(担当：児童教育学科 林 有紀)

あとがき

この度、『夙川学院短期大学教育実践研究紀要』の第4巻を発行することとなりました。

本学FD委員会では、学生による授業評価アンケートをはじめとして、評価結果の Web 上での公開や定期的な学内FD研修会の実施、機関誌『FD Today』の発行などさまざまな活動に取り組んで参りました。かねてより教員同士が教育実践を発表し合い、その成果を共有していくことこそ「質の高い授業」につながるものと考えております。

今回は3編の原稿が寄せられました。いずれも教員自身が日頃から取り組んできた教育実践の努力の成果を示すものです。本学を取り巻く状況が大きく変化する中、FDの灯りをともし続けることができたことに安堵しております。

この『教育実践研究紀要』は、教員の相互支援精神に基づく相互研修型FDを理想として、全学的な教育力向上の一環として発刊しております。そのため、できるだけ広範囲からの投稿いただけるように、すべての投稿原稿を採録することを原則としています。また、本紀要では査読制度を採らず、ピアスーパービジョン制度を設け、投稿者と編集協力者が、対等な立場から原稿の内容を協議し、質を高めて採録することを目指しました。

これらの試みが本学をはじめ、大学全体の教育力向上に寄与できればと願っております。

最後になりましたが、本誌の刊行にご協力いただいたすべての教職員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

2012年3月31日

夙川学院短期大学FD委員会

委員長 岡崎 公典

<平成 23 年度「教育実践研究紀要」執筆者一覧>

准教授 番匠明美 (児童教育学科/臨床心理学)
講師 白坂 文 (家政学科/ファッション造形)
特任講師 井上千晶 (児童教育学科/保育学)
非常勤講師 朝野典子 (児童教育学科/音楽・ピアノ)

<平成 23 年度 「教育実践研究紀要」ピアスーパーバイザー>

准教授 藤島みち (家政学科/体育学)
准教授 三木麻子 (児童教育学科/古典文学)
講師 林 有紀 (児童教育学科/造形教育)

夙川学院短期大学「教育実践研究紀要」

第 4 号(2011)

2012 年 3 月 31 日発行

編集発行：夙川学院短期大学 FD 委員会
〒662-8555 兵庫県西宮市藪岩町 6-58
(担当事務局) 教務課内 FD 委員会事務局
TEL:0798-73-9139
E-mail:fd@shukugawa-c.ac.jp

Shukugawagakuin College

Bulletin of College Educational Research

~shukugawagakuin College FD committee~

No.4 【2011】

Articles (Applied Field Research)

<Category-3>

- A Study of Education Practice that Aimed to Share Each Student's Practical Experiences for the Program of Certified Child Music Therapist. Part 2
· · · ASANO Noriko

<Category-6>

- Parenting Support in the College ; (2)Practical Report of Regional Support center "SHUKUTAN HIROBA".
· · · BANSHO Akemi, INOUE Chiaki
- Trial report of a relay lecture and the university-industry research collaboration in the theory of wedding coordinates—
· · · SHRASAKA Aya